

黒点根腐病に対するメロンの品種及び着果数と発病程度との関係

農業研究センター 農産園芸研究所 病虫部

担当者：小牧 孝一

研究のねらい

メロン黒点根腐病は、熊本県内のメロン主要産地全域に発生し、連作障害の一要因として重要な土壌病害である。その発生実態は、年次間や栽培時期、土壌条件等の栽培環境要因に左右される場面が多く、不明な点が多い。

そこで、メロンの品種間に本病に対する感受性の差があるかどうか、また、着果負担をかけた場合に発病程度に差異を生じるかどうかを確認した。

研究の成果

- 促成メロン栽培において、前年の発生ほ場で採取した被害株の根部を細断し、メロン苗の定植時に植え穴に接種して供試品種の発病程度を比較した。さらに、着果負担を変え、2個着果と4個着果の場合の発病程度についても検討した。
- 供試した6品種のうち、アンデス及びクインシーが根部褐変程度が低く、ホームランスターが最も高くなり、発病程度に品種間の差異が認められた。
- 1株当たりの着果数では、4個着果させた区が2個着果させた区より根部褐変程度が高くなる傾向を示した。

普及上の留意点

- メロン品種によって黒点根腐病の発生程度が異なるので、発病したほ場ではできるだけ本病に強い品種を選定するとともに、着果負担にならないよう適正な栽培を行う。
- 品種の選定や着果負担の軽減では、完全に発病を抑制することはできないので、土壌消毒等の他の防除手段と組み合わせて防除効果の向上を図る。

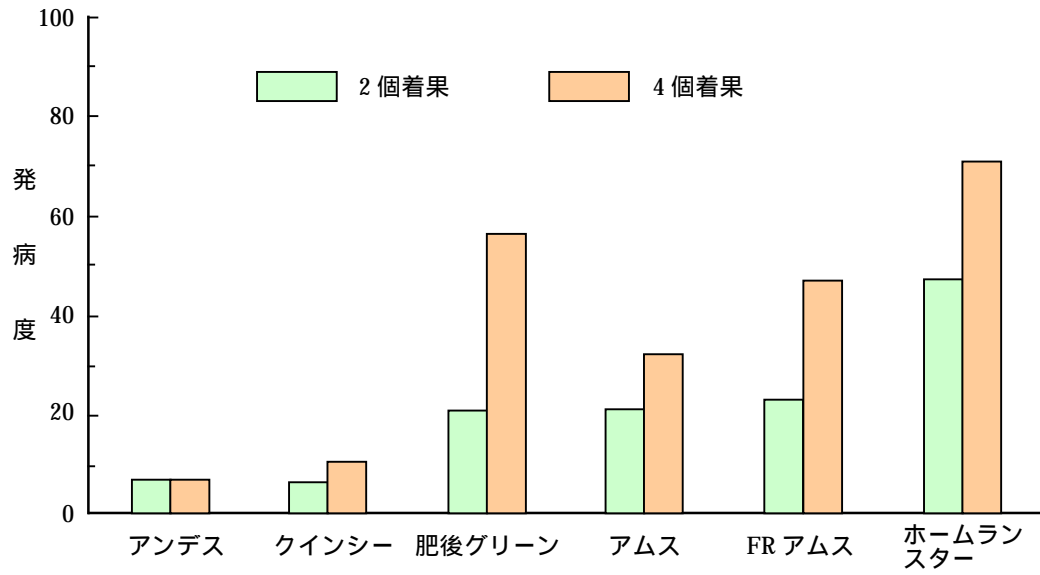


図1 品種及び着果数の相違による黒点根腐病の発病度（平成8年）

$$\text{発病度} = \frac{(\text{根褐変指数} \times \text{その個体数})}{4 \times \text{調査個体数}} \times 100$$

- 根褐変指数
- 0: 褐変が全く見られない
 - 1: 細い根の一部が褐変している
 - 2: 細い根の大部分が褐変している
 - 3: 太い根の一部が褐変している
 - 4: 太い根の大部分が褐変している